

氏 名	大 嶋 淳
学 位 の 種 類	博 士 (医 学)
学 位 記 番 号	第 4602 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者
学 位 論 文 名	摂食障害の転帰とパーソナリティー障害
論文審査委員	主 査 教 授 切 池 信 夫 副主査 教 授 石 河 修 副主査 教 授 山 野 恒 一

論 文 内 容 の 要 旨

〔目的〕 摂食障害ではパーソナリティー障害(PD)を併存することが多い。欧米の摂食障害の予後に関する研究では、PD を併存すると摂食障害の治療が難しく予後が悪いと報告されている。しかし、摂食障害の転帰とPDの併存の関連について検討した報告は少ないうえに、異文化でも同等の結果が得られるかは不明である。そこで本研究では、初診後4年以上経過した摂食障害患者の転帰とPDの関連について検討を加えた。

〔方法〕 対象は1995年から1998年まで当科を受診し、調査時まで初診から4年以上経過した摂食障害患者69例である。内訳は、神経性食思不振症摂食制限型(AN-R)が28例、神経性食思不振症過食/排出型(AN-BP)が19例、神経性過食症(BN)が22例である。電話で連絡をとり、研究参加に文章で同意を得た上で、PDの診断のための半構造化面接であるSCID、摂食障害の予後を評価するMorgan-Russell Outcome Scale等を用いて評価した。なお、全対象者から研究参加への同意を文書で得ている。また、大阪市立大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得ている。

〔結果〕 摂食障害の転帰について、AN-R群の39%、AN-BP群の15%、BN-P群の36%が予後良好であった。また、PDに関してはAN-R群の7%、AN-BP群の21%、BN-P群の14%にクラスターAのPDを認めた。AN-R群の0%、AN-BP群の26%、BN-P群の23%にクラスターBのPDを認めた。AN-R群の57%、AN-BP群の63%、BN-P群の59%にクラスターCのPDを認めた。クラスターCのPDと摂食障害の予後に有意な関連を認めた。

〔考察〕 PDの存在は摂食障害の予後の悪さと関連し、従来の欧米の研究と一致した。しかし、症例数が少なく、今後さらに研究が必要と考えられた。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

〔目的〕 摂食障害ではパーソナリティー障害(PD)を併存することが多い。欧米の摂食障害の予後に関する研究では、PDを併存すると摂食障害の治療が難しく予後が悪いと報告されている。しかし、摂食障害の転帰とPDの併存の関連について検討した報告は少ないうえに、異文化でも同等の結果が得られるかは不明である。そこで本研究では、初診後4年以上経過した摂食障害患者の転帰とPDの関連について検討を加えた。

〔方法〕 対象は1995年から1998年まで当科を受診し、調査時まで初診から4年以上経過した摂食障害患者69例である。内訳は、神経性食思不振症摂食制限型(AN-R)が28例、神経性食思不振症過食/排出型(AN-BP)が19例、神経性過食症(BN)が22例である。電話で連絡をとり、研究参加に文章で同意を得た上で、PDの診断のための半構造化面接であるSCID、摂食障害の予後を評価するMorgan-Russell Outcome Scale等を用いて評価した。なお、全対象者から研究参加への同意を文書で得ている。また、大阪市立大学大学院医学研究科倫理委員会の承認を得ている。

〔結果〕 摂食障害の転帰について、AN-R群の39%、AN-BP群の15%、BN-P群の36%が予後良好であった。また、

PDに関してはAN-R群の7%、AN-BP群の21%、BN-P群の14%にクラスターAのPDを認めた。AN-R群の0%、AN-BP群の26%、BN-P群の23%にクラスターBのPDを認めた。AN-R群の57%、AN-BP群の63%、BN-P群の59%にクラスターCのPDを認めた。クラスターCのPDと摂食障害の予後に有意な関連を認めた。

〔考察〕パーソナリティー障害の存在は摂食障害の予後の悪さと関連し、従来の欧米の研究と一致した。以上の研究結果は、わが国における摂食障害患者の転帰とパーソナリティー障害の関係に関して新しい知見をもたらしたものであり、今後この領域の研究に寄与する点は少なくないと考えられる。よって本研究者は博士（医学）の学位を授与されるに値するものと判定された。